Le Livre de saphir

Gilbert Sinoué

サファイアの書

ジルベール・シヌエ著

阪田由美子訳

Livre de saphir

Gilbert Sinoué

サファイアの書

ジルベール・シヌエ著
阪田由美子訳

NHK出版

サファイアの書

1998年4月25日　第1刷発行

著　者――ジルベール・シヌエ

訳　者――阪田由美子

発行者――安藤龍男

発行所――日本放送出版協会

〒150-8081　東京都渋谷区宇田川町41-1

電話　(03)3780-3319（編集）

(03)3780-3339（営業）

振替　00110-1-49701

印　刷――三秀舎／近代美術

製　本――石毛製本

定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Japanese Edition Copyright　©1998 Yumiko Sakata

ISBN 4-14-005292-9 C0097　Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉

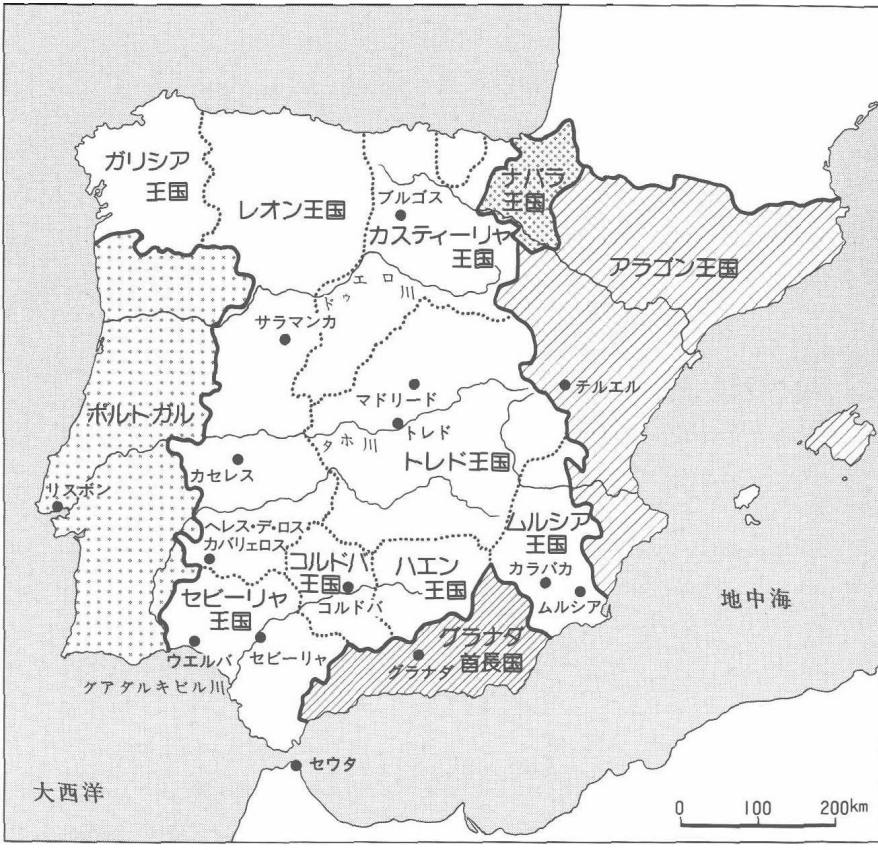
本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、

著作権侵害となります。

サファイアの書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

15世紀末のイベリア半島



主な登場人物

マヌエラ・ビベロ……イサベル女王の幼友達
サムエル・エズラ……ユダヤ人のラビ
シャヒル・イブン・サラグ……アラブ人のシャイフ
ラファエル・バルガス……フランシスコ会修道士
アベン・バルエル……ユダヤ人の織物商
ダン・バルエル……アベン・バルエルの息子
ソリマン・アブ・タレブ……イブン・サラグの召使い
イサベル……カスティーリャ女王
エルナンド・デ・タラベラ……イサベル女王の聴罪司祭、財政大臣
フランシスコ・トマス・デ・トルケマダ……異端審問長官、司祭
ガルシア・メンドサ……異端審問所の捕吏
アルバレス……トルケマダの秘書の神父
メネンデス……ユダヤ人の改宗者、神父
ディアス……タラベラの密偵
フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス……フランシスコ会修道士
クリストバル・コロン……ジェノヴァの船乗り
フアン・ペレス……ラ・ラビダ修道院の院長

1

私には大地から上がる苦痛の叫びが聞こえる。

『スペイン挽歌』

トレド、一四八七年四月二十八日

太陽がようやく大聖堂（カテドラル）の上に昇り、ソコドベル広場を真っ赤な光で満たした。

カスティーリャ王国イサベル女王陛下の聴罪司祭フライ（修道士の敬称）・エルナンド・デ・タラベラは、先細に刈った白髪交じりの鬚（ひげ）をなで、かたわらに座る若い女性のほうへそっと身をかがめた。

「判決宣告式（アウトデフェ）（スペインの宗教裁判所による死刑の宣告と処刑）は初めてではないでしょう、ドニャ（女性の名前の前につける敬称）・ビベロ？」

「それは思い違いですわ。このような式には何度も招かれていますが、一度もお受けしたことはありません。きょうも陛下があれほど強くおっしゃらなければ、たぶん……」

最後の言葉をかき消すように、大聖堂と周辺の教会の鐘がいっせいに鳴りだした。

行列が広場に入ってきた。

最初に目を惹いたのは十字架だった。黒い布に覆われ、王立修道院のドミニコ会士の背に担がれた、神の栄光と庇護の象徴。宣告式の常連ならそれが濃い緑色であるのを知っている。だがそれは厳かな赦免（しゃめん）の瞬間まで明かされない。十字架の陰には兜（かぶと）をかぶった槍兵、頭巾をかぶった修道士、神への賛歌を唱え

る司祭の姿が見える。

市と教会の要職者は二列に分かれ、国王代官（地方管轄区の長。国王直任）のあとに市参事会員、首席司祭のあとに司教座聖堂参事会員、さらに裁判所の面々といったぐあいに、位の高いほうから順に並び、整然と行進している。主席検察官はレースと銀の房飾りをあしらった、長方形の深紅のタフタ織りの幟を手にしている。異端審問所（スペインでは、イサベルと夫のフェルナンドが、一四七八年に異端審問所を開設した）の紋章が描かれたその幟はまさに信仰の御旗である。

〈悔悛者〉つまり被告は、行列の先頭に立っている。その数約百人ほど。黄色のラシャ地の上着に三角帽子をかぶり、片手に蠟燭を持っている。

あたりは人でごった返している。町じゅうの貴族や名士が集まる特別席に潜りこもうとする人々が、押しあいへしあいしているのだ。

観覧席と演壇の中間には柵で囲まれた台が設置されている。有罪を宣告された者が万一屈辱、苦悩、後悔といった表情を見せたとき、観客がそれをひとつも見逃すことがないよう、よく見えるように彼らをそこに押しこめるのだろう。

演壇には二つの書見台が置かれている。小姓がその一方に判決文の入った小箱を置き、もう一方に襟垂帯と短白衣の載った、銀細工の大きな盆を置いた。

声が上がった。声の主は礼拝堂付き司祭で、片手にミサ典書、片手に十字架を持っている。

「われら、すなわち国王代官、市長、警吏、騎士、市参事会員、そしてこの高貴なる町トレドの名士、住人であり、聖なる母の教会に従う真実まことのキリスト教徒であるわれらは、われらの前にある四福音書にかけてイエス・キリストの御教えを守り、守らせることを誓う。異端もしくは背教の疑いのある者を全力で追跡し、捕らえ、捕らえさせることを誓う。もしわれらが誓いを守ったならば、引きかえに神が、聖なる福音が、われらを守りたまわんことを。われらが主なる神が、この世でわれらの肉体を、あの世でわれらの魂を救いたまわんことを。われらが誓いに背いたならば、それと知りつつ御名に偽りの誓いを立て

た悪しきキリスト教徒にするように、われらを厳しく追及し、われらに大きな犠牲を払わせたまわんことを」

人々が声を合わせていっせいに叫んだ。「アーメン！」

礼拝堂付き司祭の演説が続いているあいだ、エルナンド・デ・タラベラは終始無表情で、無関心というか、心ここにあらずといった感じだった。隣の女性が取り憑かれたような表情をし、その場をくいいるように見つめているだけに、彼の放心ぶりがいっそう目立った。

別の人物が重々しい足取りでゆっくりと当番審問官のほうへ進み出た。審問官の前まで来ると、彼は片膝をつき、待機の姿勢を保った。

彼の頭上で当番審問官フライ・フランシスコ・デ・パラガが大きな十字を切った。

マヌエラ・ビベロは小声で尋ねた。

「あのひざまずいている人は？」

「異端審問最高会議の審理準備員で、ドミニコ会士のトマス・リベラ神父です」

トマス・リベラはすでに立ちあがり、書見台の一方に向かっていた。書見台の前に立つと、柵のなかの〈悔悛者〉を一瞥し、軽く息を吸ってから声を張りあげて言った。

「モーセの律法を守る者、これら不実な偽装改宗者（隠れユダヤ）ほどの神の敵、罰を受けるに値する罪人がいるだろうか。彼らが言う希望とは理性の喪失、忍耐とはかたくななこと。彼らは卑しい生き方をし、人からも神からも嫌われている。したがって神聖な裁きによって罰を下し、神の利益を守るのは当然である。立ちあがりたまえ、主よ、みずからを示したまえ」

トマス・リベラはひと息つくと〈悔悛者〉を鋭く指差し、力強く繰り返した。

「立ちあがりたまえ、主よ！」

マヌエラは寒気を覚えた。だが雲ひとつない空には四月の太陽が輝き、トレドではこの一週間いつにな

く暑い日が続いている。
「ここで焼くのですか。この場ですぐに？」
無邪気に質問している自分に気づいて、マヌエラは驚いた。
「いいえ。どんな場合でも教会が死刑を宣告することはありえません。ましてや刑を執行することなど絶対にありえない。判決文の朗読が終わったら、受刑者は世俗の手にゆだねられ、城壁の外にある火刑台（ケマデーロ）へ連れていかれます。もうじきごらんになれますよ」
「町の人々も火刑に立ちあうのでしょう？」
「ええ」
「大勢？」
タラベラの唇が苦笑にゆがんだ。
「ドニャ・ビベロ……。たいへんな読書家と評判のあなたがご存じないのですか。人は他人の苦しむ姿にたまらない快感を覚えるものなのです。なかには焼けた骨を拾うのに立ちあい、刑吏について下水渠（げすいきょ）まで行く者もいる。二度と戻ってこられない場所へ異端者をしかと送り届けたことを確認しようとするかのように」
壇上ではひとりのドミニコ会士が〈メリトス〉、すなわち罪状と判決を要約したものの朗読を始めたところだった。やがてその役は別の司祭へと引き継がれ、それからまた別の司祭へと引き継がれた。どの司祭も努めて同じ声の調子、同じ速さを保ちながら、悲壮感と荘厳さを交互に織りまぜ、鍛えぬかれた毒舌で聴衆の注意をたえず惹きつけておこうとしている。
それがどのくらい続いただろう。六時間か、八時間か。朗読が終わったときには、太陽は大聖堂の陰に消えていた。立ちこめる蠟燭と香の匂い、行商人が茶を焙（ほう）じている匂いや脂（あぶら）の焦げた匂いに混じって、つんとする匂いがする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マヌエラは頭のなかが空になり、すべての知覚機能が停止してしまったように感じられた。はじめのころの動揺は消え、緊張感もなくなっている。へとへとに疲れ、なにもする力がない。

だが町の人々は違った。彼らは式のあいだじゅう、憎悪と憐憫、恐怖と驚嘆という相反する感情のあいだで揺れ動いていた。明け方から外に出てじっと待っていた彼ら群衆は、今や広場のまわりに集まり、文字どおり揺れていた。

ふとマヌエラは、火刑台行きの〈悔悛者〉が集められている台の上に目を向けた。女、男、足の不自由な人々、それに交じって不気味な等身大の人形が見える。欠席裁判で有罪判決を受けた者の身代わりを務める人形である。

マヌエラ・ビベロはひとりの男に注目した。なぜその男に特別関心を惹かれたかはわからない。おそらくはその人物――その老人から漂う落ち着いた雰囲気に強く心を打たれた、さもなければ老人が発しようとしている言葉を、唇の動きから読みとろうとしていたのかもしれない。

その目は澄みわたり、高齢のわりには背筋がぴんと伸びている。何者だろう。なんの罪に問われているのだろう。家族はいるのだろうか。おそらくユダヤ人だろう。改宗したのにもとに戻ったのだろうか。あの不思議なまでの落ち着きはどこから来るのだろう。

突然、二人の視線が交わった。マヌエラは老人のまなざしに、内心いわれのない動揺を覚えた。危うく席を立ちそうになったが、漠然としたなにかが彼女を引き止めた。好奇心か、哀れみか。タラベラに声をかけられるまで、マヌエラはその場に釘付けだった。

「ドニャ・マヌエラ。そろそろ時間です。私についていらしてください」

タラベラは、観覧席の裏で待機している馬車を目指し、人込みをかき分けた。マヌエラは言われるままにふらふらとそのあとについていった。

三十分後、気がつくとマヌエラは城壁の外にいて、火刑台のすぐそばの貴族用観覧席に座っていた。

〈聖庁〉、すなわち異端審問所の顧問神学者を除けば、そこには裁判所関係者はひとりもいなかった。彼ら聖庁付き神学者の役目は、死刑囚の最期に立ちあい、さらには、そしてこれがいちばん重要なのだが、絞首による苦しみの軽減を認めるかどうかを決めることだった。

前の晩から立っている火刑台のシルエットが夕焼け空にくっきりと浮かびあがり、刑吏が平然とした面持ちでその時を待っている。すでに故人となっている受刑者は、暗褐色の骨箱のなかで彼らの死を誇示していた。

受刑者が現われるまでしばらく、といっても二十分足らずだが、待たなければならなかった。野次馬の数は先ほどと変わらないが、こちらの連中のほうがはるかに好戦的な感じがする。最初の投石に続いて次の投石があり、どっと野次が飛んだ。兵士が警護にあたっていなければ、人々の怒りで刑は投石刑と化していただろう。

マヌエラは先ほどの老人を目で探した。はたして彼はそこにいた。頭を上げ、相変わらず落ち着いた様子で、唇にはうっすらと微笑みさえ浮かんでいるように見える。

マヌエラはまたしても動揺を覚えた。そして、その場から立ち去りたいという衝動にまたしても打ち勝った。

恐ろしい光景と自分とのあいだに幕を張ろうとするかのように、マヌエラは瞼を閉じた。ふたたび目を開けたときには、すでに二人の受刑者が炎に包まれていた。

ひとり目の受刑者は声も上げず、今にも死にそうだった。二人目はわめき、懇願し、もがいている。あまりもがくので、すでに火のついた紐がほどけてしまうほどだった。

二人目の男が火刑台の上から火だるまになって飛びおりた。すぐに刑吏が駆けより、男に足枷をはめ、もう一度火に放りこんだ。男はしばらくじっとしていたかと思うと、ふたたび火刑台から飛びおりた。今度は兵士のひとりが銃身で頭を殴ってから、これで最後とばかりに男を火に放りこんだ。

つんとする匂いが黄昏の空を包みこんだ。毛と汗の匂い、それに人肉の焼ける匂いの混ざった匂いだ。人間にかわって人形が登場した。腕で抱えこまれるようにして棺が体に固定され、その上に大きな文字で《アナ・カリリョ》と書かれている。きっと前の晩に獄死したのだろう。

人形と棺が炎に包まれるやいなや、厚い板に縛りつけられた六十歳ぐらいの女が前に押し出された。前の二人とは異なり、女はすぐには火に放りこまれなかった。神のお慈悲により、そして女が自分の過ちを認めたので、聖庁付き神学者が絞首を認めたのである。

刑吏のひとりが女のほうに身をかがめた。女の首に刑吏の手が回った。女は目を大きく見開いてなにか言おうとするが声にならない。女の全身が痙攣して震えた。

人々の嘲笑を浴びながら女は失禁した。刑吏がいやそうに女を抱きあげ、火刑台に上げた。ほとんど同時に滑らかな木の骨箱が炎に投げこまれ、女の頭に激しくぶつかった。

マヌエラの後ろでひそひそと話す声がした。

「あれは、きのう秘密牢の獄吏が掘り出した十七歳の隠れユダヤの娘の骨らしい」

「きのう？　どうしてまたそんなに早く」その声は笑っていた。「モーセがその娘を復活させるとでも思ったのかしら」

「いや違う。骨を乾かして風をあて、悪臭を取り除かなければならなかったんだ」

「悪臭？　でも、あの連中は生きているときでも臭いわ」

マヌエラは吐き気が込みあげてくるのを感じた。先ほどのタラベラの言葉が思い出される。

《ご存じないのですか。人は他人の苦しむ姿にたまらない快感を覚えるものなのです》

マヌエラは唇を噛み、叫びたいのをこらえた。

今や場面は喜劇と化しつつあった。足の不自由な受刑者が、椅子に座らされて火刑台へ運ばれる途中、観衆や刑吏や町の名士をののしり、さんざん悪態をついたのである。

すこし間があき、時折火のパチパチいう音や観衆の罵声が聞こえていたが、やがて聖庁付き神学者によって新たな犠牲者の名前が告げられた。
「アベン・バルエル！　アベン・バルエル、ブルゴス生まれ、織物商、トレド在住」
マヌエラははっとした。例の老人の番がやってきたのだ。
老人は顔を上げ、刑吏に連れていかれるまでもなく、しっかりとした足取りでみずから火刑台へ向かった。
誰かが投げた石が老人のこめかみに当たった。だが老人は眉ひとつ動かさない。
まさに火に入れられようとする瞬間、老人が振り返った。またしてもマヌエラと目が合った。まるでずっとこちらを見つづけていたかのようだ。
老人の視線が、マヌエラの心に深く、鋭く突き刺さった。老人は刑吏に小突かれ、ふたたび前を向いて歩きだしたが、さもなければいつまでもそこにとどまり、じっとこちらを見つめていたにちがいない。
突然、マヌエラは息苦しさを覚えて立ちあがった。
「申しわけありません、フライ・タラベラ。失礼させていただきます」
タラベラがこの突然の退出の理由を尋ねる間もなかった。マヌエラはすでに階段を駆けおりていた。

夕暮れの空に向かってわずかに開かれた食堂の窓から、神の栄光を称える歌がひっきりなしに聞こえていた。
給仕係が飾り戸棚からグラスを取り出してワインを注ぎ、その場にいた侍医に差し出した。侍医はしばらく匂いを嗅いでから、もったいぶったしぐさでワインを口に含み、一瞬間を置いて、よしとばかりにうなずいた。それを受け、給仕係が女王のほうへ進み出て片膝を突き、ワインを差し出した。
カスティーリャ女王にしてアラゴン王フェルナンドの妻イサベルは、そっけなく首を横に振った。

「ドニャ・ビベロに差しあげなさい」
イサベルは右隣に座っている若い女性を示すと、ややうんざりしたように言った。
「国土回復運動（レコンキスタ）（七一一年以降イスラム教徒に占領されたイベリア半島を、キリスト教徒の手に奪回しようとした運動。一四九二年にグラナダを奪回し達成された）の不便な点のひとつは……宮廷が移動することだわ（当時は定まった首都はなく、王の移動とともに宮廷も移動した）。つねに移動しているから、女王の習慣について、この場合はワインに興味がないということだけれど、たえず説明を繰り返さなければならない。本当は、このぐらいの不便はなんでもないわ。これがもっと深刻な問題の反映でなければね。行政、役人、国家。なにもかも遅々として進まない……」
マヌエラ・ビベロはかすかに微笑んだ。
「こんな話があるのをご存じですか。死に神が両陛下の臣下のなかから自分の手下を募らないのは残念だ。もしそうなれば、人はすくなくとも千年は生きられるのに、というのです」
イサベルは感嘆の声を上げた。
「知らなかったわ。うまいことを言うものね」
それから急に険しい顔になり、身をかがめた。
「なぜなの」
「は？」
「さっきは式が終わっていないのになぜ突然逃げだしたの。あなたの態度にあわてたと、フライ・タラベラが言っていたわ。なぜなの」
率直に答えるか、表現をすこし和らげて説明するかで、マヌエラは一瞬悩んだ。そして自分の果たすべき役割から、というよりは友人を傷つけたくないという思いから、後者を選んだ。
「もうくたくただったのです。なにしろ七時間ですから。それに昔から痛いのは苦手で……とくに他人（ひと）が苦しむ姿を見るのはだめなんです。炎に包まれている人々を見るなんて……残酷で……」

「だめ！」
冷たく高圧的な女王の声が部屋に響きわたった。
「だめ！　感情なんか超越して見るのよ。あなたはスペイン人で教会の子、キリスト教徒なのよ。判決宣告式は国民感情や宗教的信念を刺激するいちばん効果的な方法だわ。私たちを非難する人もいるけれど、べつに報復でも弾圧でもない、さまよえる魂を神の御許へ戻すよい機会なのよ。これにはスペインの命運がかかっている。私たちの国は同じひとつの信仰で結ばれて初めて存続できるの。たったひとつの、真の信仰……つまりわれらが主イエス・キリストを信じることよ。私は異端の指導者に手を差しのべたのに、彼らは私の言うことを聞かなかった。最初の異端審問の裁判を実施するまで長いこと……二年も辛抱したのよ。それもローマ教皇のお許しをいただいていたのに。だから残酷だなんて言われると……」
女王はいらだたしげにひと声上げ、先を続けた。
「正直に言うわ。あなたが逃げだしたと聞いて私は悲しかったわ。今朝のあなたは私の名代でもあっただけにね」
女王は口をつぐんだ。すかさず肉切り役の侍臣が食卓に近づき、女王の前のパン屑を恭しく取り除いた。
女王は侍臣が仕事を終えるのを辛抱強く待ってから、態度をがらりと変え、マヌエラの手をやさしく叩いた。
「この話は忘れましょう。来てくれて嬉しいわ。とても会いたかったのよ」
「私もです、陛下。この三週間というもの、陛下がまもなくトレドにお着きになるとの知らせが連日のように入り、一瞬、もう二度とおいでにならないのではないかと思いました」
「いえ、来たでしょうね。たとえあなたに会うためだけでも」
女王はすぐに質問した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com